

【 変わる気象サイクル 】

今日は暦の上の八十八夜、昔から“八十八夜の別れ霜”などと伝えられていたが、今年
は季節の進行が早く北日本を除いて平地ではその心配はなさそうだ。しかし、内陸や盆地
では、シベリア育ちの冷たい高気圧が南下してきた時には、新緑寒波に対して注意が必要
である。この暖春の影響を受けて、日本列島の多くの地域で、農作物や花卉の生育が予想
以上に進んでいるため、病虫害対策は平年より早めの管理が大切である。

気象の面でも暖かい地上の空気の上空に寒気が流入してきて、各地で度々春雷を観測し
ており、天気のことわざに「春の雷は日照りのもと」がある。この意味は新暦の5月の頃に雷が
多い年の夏は、日照りが続き豊作が期待されるということである。

その根拠として春に前線にともなう雷が多い年の夏は、太平洋高気圧の勢力が強く暑く
なりやすいからである。(天気予知のことわざ辞典より)

かつて、大気中に占める二酸化炭素の増加にともなう地球温暖化現象の心配がなかった
時代の日本は、四季の天候がスムーズに移行し、春が高温であった年はその延長で夏も暑
くなるケースが多かった。精農家などの過去の事例のメモを頼りに、天候推移を予想し、
農作業を行えばそれなりの収穫も良かったようだ。

しかし、昨今は気象のサイクルが早くなり、昔のパターンが通用しなくなりつつある。
その一例が、昨年12月下旬の北半球高層天気図が、1963年北陸豪雪の大寒波のとき
と非常に類似していたようだが、実際の天候は1月中旬以降は暖冬に終始した。

とくに今年は、エルニーニョ現象が発生し、夏は不順な天候が予想されているため、今
のうちから肥料の種類や施肥量を選別した事前の対策や作物の根張りをよくしておくなど
の心構えが大切のようだ。

(気象情報システム・高津 敏)